

ウェルカムパーティー報告

四国本部（徳島県）
パーティー班 藤本 一郎
技術士（建設部門）



1. 概要

午後1時から開催された各連絡会議終了後、ウェルカムパーティーが開催されました。

日時：2019年10月5日（土）18:00～20:00

会場：阿波観光ホテル

参加人数：約350人

《次第》

- 歓迎セレモニー：詩吟&詩舞 西条 藍峰様
- 歓迎挨拶：日本技術士会会長 寺井 和弘
- 来賓挨拶：徳島県副知事 海野 修司様
- 乾杯：阿南工業高等専門学校校長 寺沢 計二様
- 閉会挨拶：大会実行委員会副委員長 増田 義博



写真-2 西条 藍峰氏による詩舞

2. 歓迎セレモニー

パーティー開催にあたり他県から参加された方々への歓迎を込めて、西条 藍峰氏【吟詠道啓峰流阿波吟詠会】による詩吟と詩舞を行っていただきました。

吟じられた詩は、「阿波出藍の誉れ」そして詩舞は、「胡隠君を尋ぬ」を披露いただきました。



写真-1 西条 藍峰氏による詩吟

3. 挨拶

ウェルカムパーティーは、寺井日本技術士会会長の歓迎挨拶、海野徳島県副知事の来賓挨拶をいただきました。



写真-3 寺井日本技術士会会長 挨拶



写真-4 海野徳島県副知事 挨拶

挨拶の後、寺沢阿南工業高等専門学校校長の乾杯の発声によりパーティーが開催されました。



写真-5 寺沢阿南高専校長 乾杯

会場には、地元徳島県の各銘柄の地酒、そしてバイキング形式による料理を堪能していただきな



写真-6 歓談の様子

がら、会員による各地域の情報交換や旧友との再会による歓談が会場内で見られました。

4. アトラクション

アトラクションは、徳島として有名な阿波踊りを【見て】、【踊って】楽しんでいただく催しを行いました。連は、有名連の【うずき連】のみなさん、そして、技術士の勇士の方々による連舞による入場、連による壇上での演舞、その後、会場内を会員の方々との乱舞で阿波踊りを堪能していただきました。



写真-7 うずき連による演舞



写真-8 会員の方々との乱舞

5. おわりに

パーティーでは、料理、お酒そして阿波踊りで会場内は盛り上がり、予定より30分ほどの延長となりましたが、最後に増田大会実行副委員長の閉会の挨拶で、翌日の本大会に向けての活力となっていただけのことと思います。



写真-9 増田大会実行副委員長 中締め

第1分科会報告

『新たな技術と地域活性化』

四国本部（徳島県）

第1分科会主査 豊崎 裕司

技術士（建設／総合技術監理部門）

博士（工学）



1. はじめに

第1分科会は「新たな技術と地域活性化」～新しい取り組みで地方・地域を元気に～、をテーマとして、140人の参加者の下で行われました。

このテーマは、四国における新しい技術の研究成果や活用事例を全国に向けて発信することにより、四国の元気を皆様方に認識いただき、今後、より多くの方々に四国に集まっていただくことが、地域活性化の一因となると考え、設定されました。

まず始めに、徳島大学ポストLEDフォトンクス研究所の安井武史所長/教授をお招きし「テラヘルツ波を用いた非破壊検査」と題した基調講演が行われました。その後、地元徳島の代表的な産業における技術の活用事例発表として徳島大学産業理工学部の宇都義浩教授、阿南工業高等専門学校創造技術工学科の釜野勝准教授をお招きした事例発表がなされ、続いて、四国（香川、高知）の技術士2名（機械部門、建設部門）による発表が行われました。

2. 基調講演

光波と電波の両特性を併せ持つ“テラヘルツ波”は、電磁波最後の未開拓領域にあり、良好な物質透過性、非侵襲性、コヒーレント等の特徴を持ち、10年後の近未来においては、情報通信関連技術、工業・農業への応用、バイオ関連技術、センシング技術等、幅広い活躍が期待されています。

応用例として、インフラ評価への応用、スペースシャトル外壁パネルの非破壊検査、半導体パッケージの非破壊検査、ヒト歯牙の齲蝕、乾燥食品



写真1 安井所長

の検査、災害現場での状況把握、葉脈の微量水分量測定、紙の含水量測定、等が紹介されました。

特に、高度成長期に造られたインフラの老朽化、財政難により地方インフラの更新が困難、インフラ保守員の高齢化等、多くの課題を抱える我々にとって、インフラ評価への応用は非常に興味深いものがありました。

社会には老朽化が進んだインフラが多数存在し、これらを次世代に引き継ぐには、効率の良いメンテナンスが求められています。橋梁を例に挙げても、現在は5年に1回の近接目視による点検が行われており、これに代わる効率の良い点検方法の確立が待たれています。橋梁に施された塗膜の性能を評価することはもとより、吊り橋や斜張橋のケーブルの点検、コンクリートの性能試験などには相当な費用を必要としています。これらにテラヘルツ波を用いることで、コスト縮減に期待ができるのではないかと考えられます。

現在、徳島大学ポストLEDフォトンクス研究所においては、産学官オープンイノベーションとして“テラヘルツ応用研究部会”を立ち上げられ、テラヘルツ波を用いた安心安全で便利な未来を実現するための研究が行われています。

3. 事例発表

3.1 事例発表1

「自己免疫疾患に対する免疫調節剤“初乳MAF”および水溶性藍粉末の研究開発」と題しました研究開発事例を発表いただきました。

始めに“初乳MAF”に関するご発表では、マクロファー



写真2 宇都教授

ジ活性化因子 GcMAF の生物学的作用に関する説明がなされた後、“初乳 MAF”の臨床的効果について、アトピー性皮膚炎、過敏症、多発性硬化症、四肢麻痺等の治療事例が紹介されました。

続いて、阿波藍を用いた水溶性藍色素“ジャパンプルー”の開発に関するご発表では、インド産の流入や化学染料の開発を原因とする阿波藍農家の減少が、徳島県の文化と伝統を継承していく上で大きな問題となっていることが述べられました。

その後、今までにない独自の視点から藍を用いた産業を創出する必要があるとの考えから展開されている“藍屋久兵衛のシェアリングによる事業展開”が紹介されました。

2020年の東京オリンピックの公式エンブレムのカラーとして使用されているジャパンプルーの天然インジゴ色素を開発し、商品化することが狙いであり、今後のご活躍が期待されます。

3.2 事例発表2

「LED 光に対するクモの行動と ERG 信号の評価」と題した研究事例を発表いただきました。

研究の背景として、農業分野の害虫被害が多く、害虫被害がなければ収穫量は 30% 増加することや、現在、主流となっている害虫防除手段の化学農薬は、消費者の安全性、高コスト化、害虫の薬剤抵抗性等の弊害が叫ばれていることなどが述べられました。

その後、LED 光源によるヒメグモとクサグモを対象とした誘因実験による発光色依存性及び ERG 信号の波長依存性の測定結果や、走光性認証のための野外実験結果が提示されました。

今後、害虫にとって忌避効果のある LED 照明装置の開発に成功し、“LED 王国・徳島”の一翼を担っていただけることが希まれます。



写真 3 釜野准教授

4. 発表

4.1 発表1

(株)石垣 開発部執行役員 吉田智紀氏からは「ポンプゲート式小規模排水機場による浸水対策」と題し、従来の排水機場のような専用の用地

取得が不要で、建設費が安く、既存ストックの有効活用が可能な“ポンプゲート式小規模排水機場”が紹介されました。

全速全水位運転を採用することによって浸水リスクを低減することが可能になったポンプゲート式小規模排水機上の普及により住民の生命・財産を守るために活躍してくれることでしょう。

4.2 発表2

(株)高知コンサルタンツ 専務取締役 筒井秀樹氏からは「四国高知で生まれた鋼管支持杭式仮橋構台工法『SqC ピア工法』と題し、大口径岩盤掘削、土留・抑止杭、橋梁基礎



写真 4 吉田氏

工事、井戸掘工事等の過酷な現場で培った特殊基礎工事のノウハウから生まれた新しい仮橋・仮設構台工法が紹介されました。

従来工法の弱点を克服し、さらに、大規模地震にも耐えられるように改良を加えて永久橋に用いるなど、山間部の現道拡幅や断崖絶壁での施工などに威力を発揮するものと期待できる SqC ピア工法は、急峻な地形に富んでいる四国ならではの新技术であり、今後、各地での採用が期待できる工法です。



写真 5 筒井氏

5. まとめ

基調講演を含めた五つの発表は全て、これからの科学技術の発展において欠かすことの出来ないものであり、この分科会の開催により、新技术という広いテーマの中の様々な分野の技術が、インフラ整備という 1 本の糸で繋がりました。

国土強靱化を目指す我が国にとって、欠くことの出来ない新技术が、四国から全国の皆様方に発信できたことは、非常に有意義でした。

—以上—

第2分科会報告

『地域防災における技術士の役割』

四国本部（徳島県）
第2分科会担当 神田 幸正
技術士（建設部門）



1. はじめに

近時、地震や風水害などの自然災害が猛威を振るっている。地球温暖化の進行や環太平洋火山帯の活性化など、地球規模での環境変化がこれに拍車をかけている。我が国に国難とも呼ぶべき自然災害が切迫しつつあるとの認識は衆目の一致するところであろう。

こうした現状を踏まえ、第2分科会は司会：有限会社ムクタ工業 上岡 誠氏、主査：四国建設コンサルタント株式会社 天羽誠二氏のもと、基調講演と発表の2部構成で開催した。



写真-1 司会（上岡誠氏）

基調講演では、徳島大学環境防災研究センター長、中野晋教授をお招きし「災害の世紀における防災・減災・縮災戦略」と題しご講演頂いた。続いて、防災・減災、および復興支援活動に関する8編のご発表を頂いた。



写真-2 会場の様子

2. 基調講演

基調講演では、我が国の現状として、南海トラフ巨大地震や都市型地震が切迫していること、また海面水温の上昇傾向や線状降水帯形成に伴い主要都市での広



写真-3 中野晋氏の基調講演

域浸水被害の危険性が高まっていることが指摘された。そして、まさにこの「災害の世紀」を無事切り抜けるために、防災・減災の急ピッチの進展なしに、これらの災害からの復興が極めて困難であることが強調された。

防災・減災、そして縮災のためにはインフラ整備が必要不可欠である。被災に伴う経済損失に比べると、遥かに少額なインフラへの投資によって大きな縮災効果が望める。しかるに、そのことへの国民の理解は得られがたい。今こそ災害対策の重要性を伝え理解者を増やす努力を要するとのこと。そのためには国民とのリスクコミュニケーションが重要であると説かれた。

現在、徳島大学では防災・危機管理能力の高い人材育成に取り組んでおり、防災士養成講座のほか、香川大学と共同で「災害・危機対応マネージャー」の養成を行っている。また災害時の事業継続・地域継続を実現するため、BCPの普及と運用の指導にも力を入れておられ、由岐町においては事前復興を地域住民とともに取り組んでおられる。

3. 「地域防災における技術士の役割

～激増する自然災害に立ち向かうために～

◆株式会社オオバ東北支店 齋藤 明 氏

“復興まちづくりは「人々がつないでいくもの」と題し、自らを何かに「つなぐ」行為と「事前復興」の理念との融合の重要性について、徳島県の現状と課題、および県南の由岐町における事前復興の活動事例などを交えて分かりやすく説かれた。



写真-4 齋藤明氏の発表

なお、復興のレジリエンスとして、平時の一元的情報管理や地籍調査の推進などが急務とのこと。

◆株式会社和晃地質コンサルタント 持田拓児 氏

“技術士よ、今こそ立ち上がれ！21 部門で支援する防災・減災への挑戦！”と題し、技術士は「これからは、平常時の活動を最も重視して活動すべき」との考えのもと



写真-5 持田拓児氏の発表

展開している九州本部の取組みについてご紹介下さった。

すなわち、①21 部門の専門家集団である技術士が連携し総合力を生かした活動を行うことと、②自治体や地域住民のニーズに即した活動を行うこと、③土業連絡会や NPO と連携すること、などを通じて、最終目標である災害に直面しそうな住民が「素早い避難スイッチを入れる」ことができる仕組みの構築を目指すとの考えが示された。

◆都市・地域住環境研究室 小島和彦 氏

“地域防災における技術士の役割と葛藤”と題し、ご自身が所属する日本技術士会近畿本部（登録）防災研究会が、活動の軸を災害調査・提言から事前の防災教育・啓発、事後の復旧・復興支援に



写真-6 小島和彦氏の発表

移しつつある背景と現状について、活動上の葛藤を交えてご紹介下さった。

また、今後の方向性としては、①住民等との連携、②新規会員の獲得、③多様なセクターとの連携・協働、および④ファンドレイジングの実現などが重要との考えを示された。

◆株式会社建設技術研究所 野村 貢 氏

“住民の見守り力を引き出す防災の進め方”と題し、地盤工学会関西支部が福井市高須町において行っている実験的取組みについてご紹介下さった。



写真-7 野村貢氏の発表

住民参加型斜面計測・モニタリングによって、災害被害軽減を住民の日常生活のなかに浸透させようとする試みであり、自律的なリスク早期発見や早期避難行動を促そうとするものである。住民の生命と直結したものであり、しっかりとした工学的背景が必要であること、そこに地域に根差した技術士の参画が期待されていると力説された。

◆新太平洋建設株式会社 城戸 寛 氏

“北海道本部防災支援連絡会議」活動報告”と題し、平成 30 年 7 月に北海道本部に設置した防災支援連絡会議の活動についてご紹介下さった。



写真-8 城戸寛氏の発表

先の平成 30 年北海道胆振東部地震も踏まえ、道内全域における地域防災力の向上を目指した活動に着手しておられた。

また、道内全域での体制づくりを喫緊の課題として、技術士間の連携、行政機関との協働などの体制づくりなどを進めておられた。

◆株式会社テクニコ 山下祐一 氏

“平成 30 年 7 月豪雨災害の被災地復興まちづくり支援”と題し、土石流の流出により 12 名の方

が亡くなられた熊野町川角地区「大原ハイツ」の復旧・復興計画における中国本部による支援活動内容の紹介と今後の課題についてご報告頂いた。



写真-9 山下祐一氏の発表

技術士が士業連絡会と連携し地域防災へ参画した先駆的取組みであり、技術士会にとって今後のモデルとなる示唆に富む内容が多数含まれていた。

◆株式会社特種東海フォレスト 山之上 誠 氏

“「新たな世代(とき)へ、技術士の挑戦～静岡県の防災”と題し、「災害発生時の具体的な支援のための実践体制の充実を目指す」ことを目的として行ってこられた静岡県支部の取組みをご紹介下さった。



写真-10 山之上誠氏の発表

静岡県など複数の自治体と災害協定を交わしておられ、また活動の一環として「家族で考える防災 Q&A」を発刊しておられた。

◆株式会社地研 森 直樹 氏

“技術士は地区防災のリーダーたれ”と題し、まず今日までの四国本部の活動を振り返り、次いで地域防災活動を支援するにあたっての課題を考察した後、その解決策を提案された。



写真-11 森直樹氏の発表

技術士としての活動は「命を守る」防災活動にこそ意義がある。幅広い専門性・多様性を生かした活動で地域をまとめることができる能力をもつ我々技術士こそ、地区住民の一人として「地区防災計画」を進めるリーダーたれと力説された。

4. 質疑応答

基調講演および8編の発表に対してフロアから熱心な質問が寄せられた。

基調講演については縮災のためのポイントに関する中野晋氏への質問などのほか、8編のご発表についても、例えば、地域に溶け込んだ防災活動を行う一方策としての防災士取得に関する意見交換、復興を加速する地籍などの権利関係のデータベース化(一元管理)の進捗状況に関する情報収集方法、住民参加型斜面計測・モニタリングに関する質疑など、本分科会を今後の活動に生かさんとする熱心かつ真摯な意見交換がなされた。短時間ながら質問者のみならず聴講者にとっても有益なひと時であった。



写真-12 質疑応答の様子

5. おわりに

最後に天羽主査が総括を行った。技術士間はもとより士業連絡会との連携を図り、なお一層、地域防災活動への技術士の浸透を促進するとともに、弛まぬ研鑽によって防災・減災・縮災に努めることを確認し、第2分科会を閉会した。



写真-13 天羽主査による総括

第3分科会報告

『地域活性化に寄与する男女共同参画のあり方』

四国本部（徳島県）

第3分科会主査 花岡 史恵
技術士（建設部門）



1. はじめに

第46回技術士全国大会の第3分科会は、「地域活性化に寄与する男女共同参画のあり方～自分らしく働き続けるために～」をテーマとして開催し、スタッフ・男女含めて約40名の参加があった。

第3分科会では、まず3編の小論文発表を行い、その小論文からあらかじめ抽出したキーワードを元にグループワークを行う形式で実施した。

2. 小論文発表

小論文発表では、①女性技術士として、②男性技術士として、③技術士補として、の3つの視点から、今回のテーマに沿った内容の発表をいただいた。

女性技術士としての発表は、福田和恵氏より、ご本人の仕事内容や役割、また女性技術者としての特徴や子育て技術者としての特徴などを示すことで自分らしく働き続けるための前向きな考えが示された。



写真1 福田和恵氏の発表

男性技術士としての発表は、飯山直樹氏より、日常における男女参画や経済の視点からの提案お

よび技術者が目指す多様性のあり方について、参考文献等の引用と、ご本人の考えを示しながら問題提起された。



写真2 飯山直樹氏の発表

技術士補としての発表は、山本美佐子氏より、ご本人の関わる防災活動の内容や役割、また女性技術者に対する見方などを関係者から聞き取り調査を行い、女性技術者の利点や今後の役割についての意見が示された。



写真3 山本美佐子氏の発表

3. アイスブレイク

グループワークを行う前に、参加者の雰囲気

和らげ、意見交換が活発に行われるように、軽い体操と簡単なゲームによるアイスブレイクを行った。アイスブレイクとは、直訳すると「氷を割る」ということから「緊張をほぐす」といった意味合いで使われており、よく自然体験活動で用いられる手法である。初対面でも緊張がほぐれ、笑顔になることでこの後のグループワークが和やかな雰囲気が進められることから、アイスブレイクによるワンクッションは重要な役割を持っている。



写真4 アイスブレイクの様子

4. グループワーク

グループワークでは、小論文の内容より、あらかじめ5つのテーマを抽出し、それぞれテーマ毎に5つのテーブルに分けて意見交換を行った。

テーマは、「子育てと仕事の両立」「女性技術者の利点」「多様性を活かす環境」「技術者のあり方」「ワークライフバランス」とした。



写真5 グループワークの様子

また、今回は、1つのテーマを1つのグループ

で意見交換を行うだけでなく、時間を区切って、他のテーマのテーブルに移動して自由に意見交換ができるものとした。(一部ワールドカフェ手法を用いた。)

最後は、最初のグループに戻って、再度、意見を確認し、グループ内で決めた発表者により、それぞれのテーブルでの意見交換の内容を発表し、参加者全員で共有した。



写真6 Aグループ模造紙

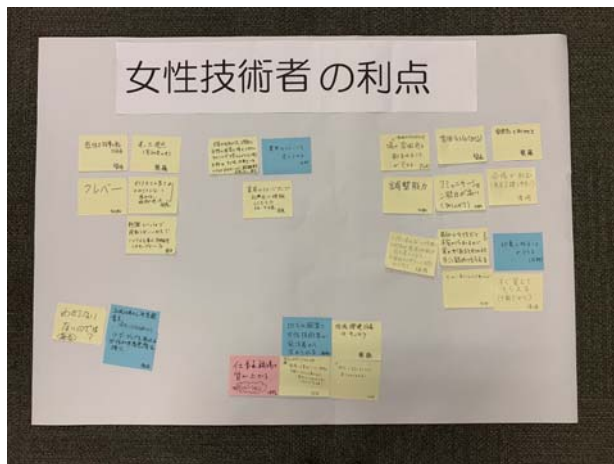


写真7 Bグループ模造紙



写真8 Cグループ模造紙



写真 9 Dグループ模造紙



写真 10 Eグループ模造紙

5. アンケート調査結果

第3分科会では、参加者にアンケート調査への回答をお願いし、今回のふりかえりとさせていただいた。アンケート調査項目を以下の表に示す。

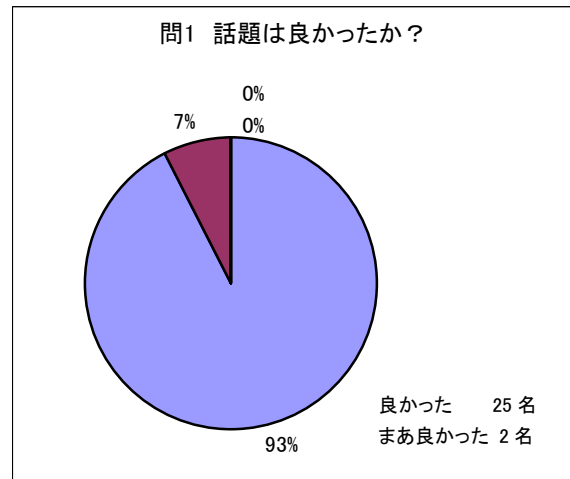
表1 アンケート調査項目

	項目(問1~8は四者択一)
問1	第3分科会の話題は良かったか
問2	男女共同参画のあり方の参考になったか
問3	今回のグループワーク方式をどう思うか
問4	グループ内で話すことができたか
問5	グループ内で他の人の話を聞けたか
問6	四国本部での会合に参加したいか
問7	開催時期はいつが望ましいか
問8	開催形態はどのようなものが良いか
問9	感想または意見を自由回答
問10	案内希望者の連絡先

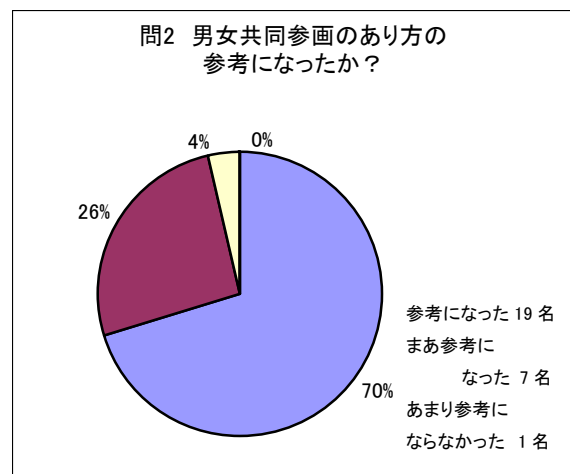
今回のアンケート調査では、参加者 30 名中 27

名(途中退席者あり)の回答があった。今回の第3分科会の評価に関する問1~5までの結果を以下より示す。なお問6~8は、今後の四国本部における男女共同参画推進小委員会主催行事等への参加に対する回答であるため、ここでは割愛する。

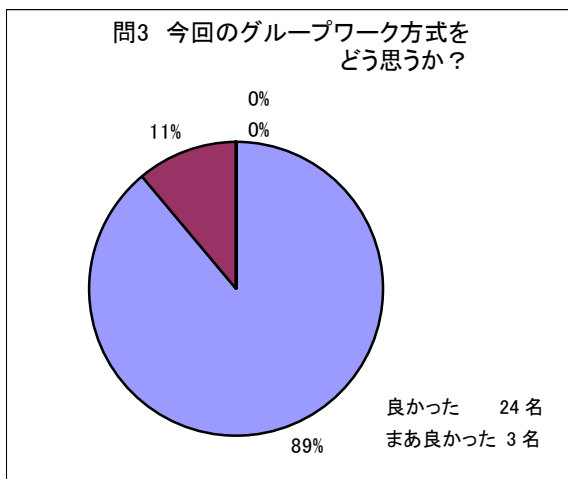
問1では、今回の第3分科会の話題についての評価を伺った。93%(25名)が良かった、7%(2名)がまあ良かったと回答しており、話題について高評価をいただく結果となっている。



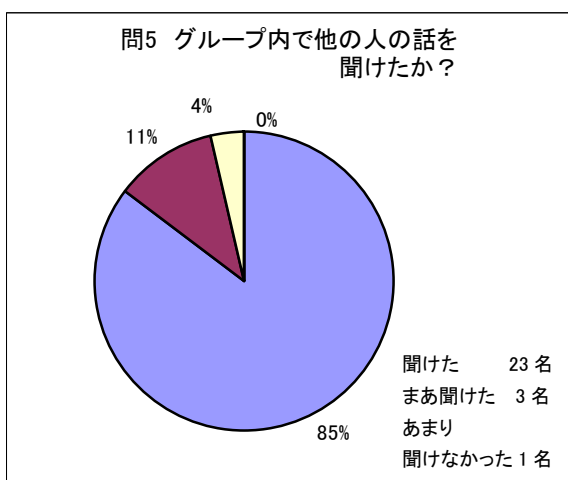
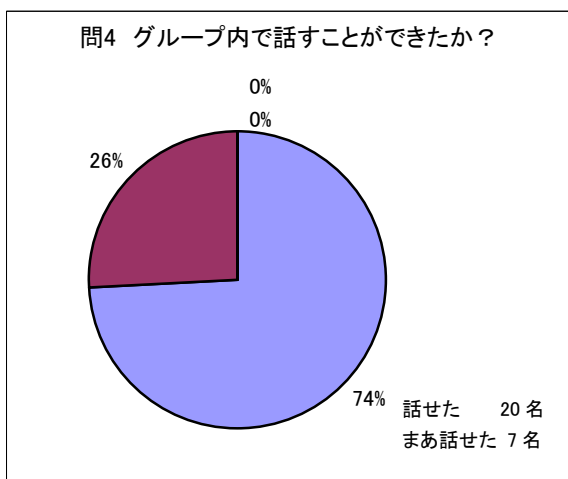
問2では、今回の話題はこれからの男女共同参画のあり方に参考になったかどうかを伺った。70%(19名)が参考になった、26%(7名)がまあ参考になった、4%(1名)があまり参考にならなかったと回答しており、概ね高評価をいただいた。



問3では、今回のように、小論文から抽出したキーワードを元にグループで話し合いをする方式についての評価を伺った。89%(24名)が良かった、11%(3名)がまあ良かったと回答しており、高評価をいただく結果となっている。



問4、問5では、グループワークで、十分な意見交換がなされたかどうかを推察するために、問4では、参加者本人が話をすることができたかどうか、問5では、他の参加者の話を聞くことができたかどうかを伺った。



問4では、74%(20名)が、話ができた、26%(7名)が、まあ話ができたと回答しており、問5では、85%(23名)が、話が聞けた、11%(3名)が、まあ話

が聞けた、4%(1名)が、あまり聞けなかったと回答しており、概ね良好な意見交換がなされたことが推察される。なお、あまり話が聞けなかったと回答した1名は、「話があまり聞き取れなかった」と書き添えられており、一部の人の話が聞き取りにくかったことを示しており、全体的に意見が聞けなかったという意味合いではないと推察される。

問9では、感想や意見の自由回答をお願いしたが、労いの言葉の他に、「全国に輪を広げたい」「若い社員にも参加させたい」「意見集にまとめてはどうか」といった前向きな意見や、「一般論に陥らないよう技術士としての視点を打ち出す必要がある」「取り組みの難しさを知った」という啓発的な意見、また、「今回の手法を仕事にも取り入れたい」といった話し合いの場づくりの大切さへの意見など、今後の励みになる意見や感想をいただいた。

6. おわりに

全国大会2日目の分科会報告では、今年度から四国本部に設立された「男女共同参画推進小委員会」の副委員長を務める末次綾氏に報告をお願いした。第3分科会関係者全員が納得する見事な報告で、とりわけ、最後を締めくくった言葉が印象的であったので、以下に紹介する。

「分科会の最後に、若い女性技術者の感想で、『私は、先輩の女性技術者の方々がブルドーザーで敷きならしてくださった道を後ろから歩いていると思っていました。でもそれは違っていました。先輩の女性技術者だけでなく、周りの男性技術者の方々の協力もあり、道が敷きならされてきたのだと感じました。』という意見がありました。この言葉を伺って、【男女共同参画】というテーマにおいて、今回の分科会が若い方にとっても非常にいい刺激になったと感じました。」

分科会報告を行ってくださった末次綾氏と、分科会で感想を述べてくださった山本美佐子氏に、あらためて敬意を表し、お礼を申し上げたい。

謝辞：今回の分科会運営にあたり、徳島県技術士会女性部会メンバーのスタッフとしての全面ご協力、四国本部の皆さまのご支援ご協力、ご参加いただきました皆さまの温かいご協力ご支援に、心より感謝・御礼申し上げます。

第4分科会報告

『楽しく充実した働き方へ、青年技術士の挑戦』

四国本部（香川県）

第4分科会担当 池谷 聖
技術士（上下水道部門）



1. はじめに

第46回技術士全国大会（四国・徳島）第4分科会【青年】は、「楽しく充実した働き方へ、青年技術士の挑戦 ～ハラスメントや働き方改革の対応と実践～」をテーマとして開催しました。

日時：令和元年10月6日 9:30～12:30

場所：阿波観光ホテル 3F 会議室

内容：1. 基調講演

2. グループワーク 参加者：73名

2. テーマ選定

労働を取り巻く環境は、少子高齢化、国際化、女性の活躍、Society 5.0 へ向けたデジタル革新など、大変革期を迎えているといえます。また、これまでは長時間労働に対する問題意識が薄く、家庭や自分の時間よりも仕事を優先することが大事という風潮がありました。しかし、今は家庭と会社のワークライフバランスを重視した働き方への変化が求められています。

一方、労働現場では、組織内に従来意識が根強く残っており、これまでの働き方と、これから求められる働き方に大きな障壁が顕在化し、企業におけるハラスメントなどが問題視されるようになってきました。

そういった社会の変化を捉えて、より良い働く環境を作る意識を持って実践することが、我々青年技術士に求められているとの思いから、今回のテーマを選定しました。

3. 基調講演

基調講演では、ハラスメントに関する話題提供として、田中法律事務所の弁護士 坂田知範氏から、事例を交えて、セクシャルハラスメント（セ

クハラ）、パワーハラスメント（パワハラ）についての講演をいただきました。



写真1 坂田弁護士 講演の様子

演題：ハラスメントへの対応

講師：田中法律事務所 弁護士 坂田知範 氏
ハラスメントについては各種ハラスメントが任意に定義されていますが、セクハラ、パワハラについては厚生労働省から定義されています。

女性であるからといってお茶くみ、掃除等を強要するという事は、従来の男性中心の考えでは日常的に行われていたことかもしれません。また、「男だから・・・」、「女には・・・」という言葉も以前はよく聞かれたかもしれません。しかし、そういった言動は、言われる側に立った時に不快に思う当事者も多く、セクハラになりうる事例として挙げられていました。

パワハラについては、業務の適切な範囲を超えて、精神的・身体的苦痛を与えたり、職場環境を悪化させる行為です。適切な範囲を理解していないと、指導する側が逆にパワハラを過剰に意識して指導が出来ないこともあるとの事例がありました。企業内のハラスメントを防止するためには、まず組織のリーダーがハラスメントに対する正しい知識を持ち、組織内で相談しあいながら問題意識を

共有できる環境を構築すること、第3者に相談できる場所があることが重要であることを認識しました。

4. グループワーク

グループワークの前に、参加者同士のコミュニケーションとしてアイスブレイクを行いました。アイスブレイクは、「つみ木式自己紹介」を実施して、グループの顔と名前を覚えてもらいました。

グループワークでは、円滑にかつ議論が進みやすいように、いくつかの条件を設定をしました。まず、各グループは企業に属していて、社員が満足できる組織作りを任されたプロジェクトチームであること、グループ毎に決められたインプットデータを背景に、『楽しく充実した働き方』を達成するためのプロジェクトをまとめる、といった条件のもとで議論を行ってもらいました。



図1 グループワークの進め方について

班	インプット1 顧客要求事項 社会的要求事項	インプット2 組織	インプット3 当事者(悩める社員)
第1班	工期短縮 品質向上 コスト低減 法令の順守	業績好調な大企業 企業の基幹商品の開発に係る重要なグループ	仕事への意欲溢れる有能な女性
第2班			介護や子育てに忙しい中堅社員
第3班			入社したての新人社員
第4班		全国展開を行っているが、 業界内では中堅企業 売り上げが低い地方の支店	仕事への意欲溢れる有能な女性
第5班			介護や子育てに忙しい中堅社員
第6班			健康に問題を抱える中堅社員
第7班		地域に根差した小さい会社 創業者の息子が2代目社長 となる 会社成長への意欲は高いが 社員からの反発も大きい	入社したての新人社員
第8班			仕事への意欲溢れる有能な女性
第9班			介護や子育てに忙しい中堅社員
第10班			健康に問題を抱える中堅社員
第11班			入社したての新人社員

図2 各班の設定条件



写真2 グループワークの様子

グループワークで意見集約を行った後の発表については、プロジェクト内容を社長に報告をするという設定で行ってもらいました。

今回は班数が11班と多く、そのために各班の発表時間が短いという問題もありましたが、短い時間でも、各班簡潔にまとめて社長への報告を行っていただきました。



写真3 グループワーク発表の様子

5. おわりに

第4分科会では、参加者の多くが全国の青年技術士交流委員会として活動を行っています。名称のとおり交流を重要視していて、ご参加いただいた皆様が積極的に交流を深めてくれたおかげで、第4分科会は盛況のうちに分科会を終えることが出来ました。今回、分科会にご参加いただき、会を盛り上げてくださった皆様、並びに我々青年と同世代で、基調講演を快く引き受けてくださった坂田様には、四国本部の青年技術士交流委員会メンバー一同、心よりお礼を申し上げます。



写真4 参加者全員の記念撮影

大会式典報告



四国本部大会実行委員会
実行委員長 古野 隆久
技術士（建設部門）

1. 大会準備

大会式典は、技術士全国大会のメインとなるセレモニーであり、その準備は2年前の会場の予約から始まった。

大会の参加予定者は500名、徳島県の交通事情を考えれば、会場はJR徳島駅周辺で選定する必要がある。予算的な制約もある中で、あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）を大会のメイン会場として確保することができ、大会式典の会場も4階の大会議室と決定した。

だが、この段階で大会プログラムは白紙に近い状態であり、大会の全容と、これを実行することの大変さを分かっているスタッフは誰もいなかったかもしれない。

大会の関連行事や各分科会の準備が進む中で、国・県等の各行政機関から多くの来賓者の出席をお願いする大会式典の準備は思うように進まず、大会シナリオの叩き台ができたのは大会の2ヶ月前であった。

式典の流れは以下のとおりである。

開会（歓迎）挨拶→会長式辞→来賓祝辞・挨拶→来賓紹介→大会宣言→閉会挨拶

例年、大会後の報告書では、大会式典の所用時間に関する問題が取り上げられている。スムーズな進行をもって、如何に所用時間の短縮を図るかの苦労が記されており、これらの過去の貴重な経験の報告を踏まえ、今回の大会では大会式典の所要時間を1時間10分程度として、大会の円滑な進行を図るべく協議・調整を行い、その都度シナリオの変更・修正を繰り返した。

だが、本年は大会直前に内閣改造に伴う組閣が行われたことなどから、来賓者の顔ぶれがほぼ確定したのは、大会の数日前であり、来賓祝辞や配席が最終的に固まったのは、式典当日の朝となっ

た。しかし、このような事態も過去の報告から想定済みであり、式典スタッフには事前に対応を周知していたため、無事に式典の開会を迎えることができた。

2. 式典本番

大会式典の参加者の総勢は来賓を含め500名、会場は満席の状態、大会は定刻（13:30）どおりに、大会実行委員長である私（古野四国本部長）の開会（歓迎）挨拶から始まり、続いて日本技術士会の寺井会長が、技術士の果たすべき役割と本大会の意義にふれて式辞を述べられた。



写真-1 寺井会長の式辞

続いて、以下の来賓の方々から祝辞・挨拶を戴いた。

- ① 萩生田光一 文部科学省大臣 代理
真先正人 大臣官房文部科学戦略官
- ② 新妻秀規 参議院議員
- ③ 飯泉嘉門 徳島県知事
- ④ 遠藤彰良 徳島市長
- ⑤ 大浦久宜 農林水産省中国四国農政局長
- ⑥ 小林 稔 国土交通省四国地方整備局長

この中で、ご自身が航空・宇宙と総合技術監理

部門の技術士で、日本技術士会の正会員でもある新妻参議院議員は、グローバル化する社会の中で、我が国の科学技術の発達を支えてきた技術士の果たすべき役割とそれに対する期待は、さらに大きくなっているとして、その活躍の場を拓げるために、自身も技術士の代表として、国会の場で積極的に活動して行きたいとの発言があった。



写真-2 新妻議員の挨拶

また、大会の直前（9月3日）に開催された全国知事会において、全国知事会会長に就任された飯泉知事は、全国から来県された参加者に対して、徳島県のPRを行いながらも、知事会会長としての立場から、国難とも呼べる大規模災害への対応の重要性に触れ、国土の保全と強靱化を図るために、技術士のさらなる活躍と日本技術士会の発展に期待するとのお言葉を戴いた。



写真-3 飯泉知事の挨拶

祝辞・挨拶が終了し、登壇者がフロア席に移動した後、時間の関係から挨拶を戴けなかった他の来賓全員（19名）に対して、お礼の意味を込めて

紹介をさせて頂いた。

続いて、舞台の設営変更を行い、中央にスクリーンが降ろされ、本大会の大会宣言が大きく写しだされた。

第46回技術士全国大会（四国・徳島）大会宣言

私たち技術士は、令和元年を迎えた最初の大会テーマを「新たな世代（とき）へ、技術士の挑戦」と題し、ここ四国・徳島に集い、新時代への希望と期待を胸に、科学技術の発展と豊かな社会づくりを目指して、誠実に貢献することを決意します。

1. 先人の知恵や地域・文化から育まれた技術を次世代へと繋ぎ、新たな技術の開発と積極的な活用により、地方創生・地域活性化に取り組みます。
2. 激増する自然災害に向けて、産学官民の連携のもと、過去の教訓を活かし、新たな技術を駆使することで、防災・減災に取り組みます。
3. 男女共同参画社会基本法の施行20年を迎え、プロフェッショナルエンジニアとしての個々の能力と責任のもと、男女を問わず、次世代を担う科学技術者の育成と支援を行います。

以上、宣言します。

令和元年10月6日



第46回技術士全国大会（四国・徳島）参加者一同

大会宣言

大会宣言は、徳島県の女性技術士2名（花岡史恵、武間亮香）が、高らかにこれを読み上げ、参加者全員の大きな拍手を持って承認された。

最後に、大会実行副委員長である右城理事が、閉会の挨拶として感謝の言葉を述べて、無事に大会式典をほぼ予定時間で終了した。

3. おわりに

多くのスタッフの献身的な活動と、関係機関の協力をもって、式典を無事に終える意ことができた。過ぎれば1時間あまりの式典ではあったが、準備に費やした時間と労力は大きなものがあった。

東京オリンピック誘致で「おもてなし」という言葉が世界に知られたが、四国は遍路の島、昔から巡礼するお遍路さんをもてなす言葉として、「おせったい」がある。2年間の大会準備期間を通じて、スタッフの意識の根底にあったのは、この「おせったい」の精神であったかもしれない。

式典は、形式に乗っ取った儀式として意味合いが強いことは否定できないが、これを一丸となって完遂させたことで、個人の集まりである技術士会の組織としての結束力が高まったことは確かであり、それを支えた「おせったい」の気持ちが、全国から足を運んでくれた参加者に伝わってくれたものと信じて、この報告を終えることとする。

記念講演報告

四国本部大会実行委員会
広報・編集部会長 菊池 昭宏
技術士（建設部門）



1. はじめに

第46回技術士全国大会(四国・徳島)での記念講演として、スポーツジャーナリストの二宮清純氏に「スポーツを通じた地域活性化」と題してご講演いただいた。氏は1960年愛媛県生まれ(筆者の高校の先輩である)。スポーツ紙や流通紙の記者を経て、フリーのスポーツジャーナリストとして独立。オリンピック、サッカーW杯、メジャーリーグ、ボクシング世界戦など国内外で幅広い取材活動を展開されている。



写真-1 講演の様子

二宮氏はスポーツライターの分野にとどまらず、政治・経済に関する発言も多く、衆議院議員の河野太郎氏との共著で「変わらない組織は滅びる」(祥伝社新書)、またビジネス書として、羽生善治氏との共著「歩を『と金』に変える人材活用術」(廣済堂新書)というタイトルの本も出版している。現在は、株式会社スポーツコミュニケーションズ代表取締役を務められている。

2. 講演概要

【講演概要：二宮氏紹介リーフレットより】

スポーツはあらゆる産業の中で、唯一、副作用のない産業である。クラブができれば人が集まる。

人が集まれば消費活動をする。地域には一体感が生まれ、まちの知名度も増す。今後は経済効果のみならず、“心のインフラ”としても、スポーツの持つ価値は、いよいよ高まっていくだろう。また、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを成功させ、日本が世界から「スポーツ大国」との評価を得る上で、カギになるのはパラリンピックではないかと考える。

障がい者スポーツの環境整備は、この先ますます進む高齢化に対する備えともなる。バリアフリー化は障がい者のみならず、高齢者や要介護者にとっても有益である。そして、それこそは本来の意味での「レガシー」だろう。



写真-2 講演の様子

講演内容は、日本のプロ野球と米国のメジャーリーグの現状～地域活性化につながる成長戦略(マツダスタジアムの成功事例)などについて触れながら、サッカーのJリーグ発足に尽力され、二宮氏と親交の深い「川淵三郎氏」との出会い～彼から学んだこと、

「リーダーに必要なもの→Passion, Mission, Action+Vision」などについて、ユーモアを交えての二宮ワールドに、会場の参加者が引き込まれていく様子がなんだか嬉しかった。



改修前

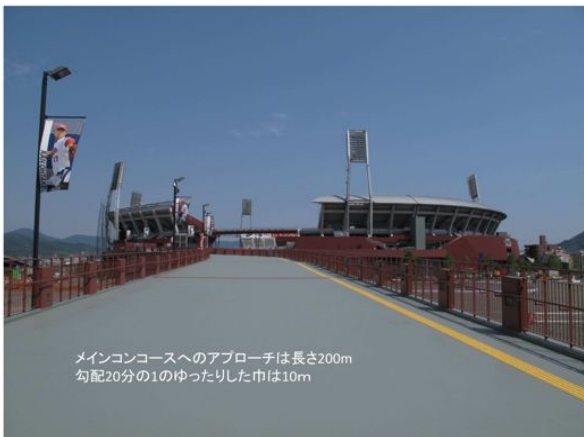


改修後

写真-4 マツダスタジアム 女子トイレの改修

女子トイレを綺麗にすることで、女性がスタジアムに足を運びやすくなる。もはやデートの主導権は女性が握っている。

グラウンドレベルから直接アクセスできるスロープ



メインコンコースへのアプローチは長さ200m
勾配20分の1のゆったりした巾は10m

写真-5 マツダスタジアム 球場へのアプローチ

ゆったりして、開放的なスタジアムへのアプローチ（勾配 20 分の 1 のバリアフリーでもある）。親子が「今日の試合はどうか？ 誰々選手ホームラン打つか？」などと会話しながら、気分が高揚してくるような空間である。

ここからは、二宮氏の講演の中で、特に興味深く拝聴した「川淵チェアマンとの話」を紹介する。

3. 川淵チェアマンとの出会いと影響

【川淵氏の略歴】

1988 年～ 日本サッカーリーグ総務主事としてプロ化に奔走、1991 年 J リーグ初代チェアマン就任、2002 年 日本サッカー協会キャプテン（会長）就任、名誉会長を経て、2012 年～ 日本サッカー協会最高顧問、2015 年 5 月 日本バスケットボール協会会長に就任。

サッカー協会会長時代、「会長」ではなく「キャプテン」と呼ばせていた。命名したのは二宮さん。「チェアマン」という呼び名の評判はよかった。

女性や子供にも愛される「キャプテン翼」、「独裁者」、「暴君」と凄く叩かれていた。

事実そんな感じだった（二宮さんから見て）。でもそれぐらいのリーダーシップがあって初めてあれだけの変革を実現できた。

当時、リーグの観客の平均が 500 人。二宮さんが取材をすると、代表戦のチケット 50 枚渡されて、「配ってくれ」。それが今となってはプレミアムチケットになってる。

若い頃の二宮さんは斜に構えていたそうだ。「トップが誰になっても、人を入れ替えても、何も変わらないだろう」。

◆ J リーグ 100 年構想

1980 年代 サッカーのプロリーグ構想準備団体が立ち上がる。当時、教育官庁がスポーツを主幹していた国は、中国・キューバ・北朝鮮など共産主義の国。西側のアプローチは、「スポーツは都市に根付いた文化」なので「すべてチーム名に都市名が入る」。

サッカー（マンチェスター・ユナイテッド、レアル・マドリール等）、大リーグ（シアトル・マリナーズ、サンフランシスコ・ジャイアンツ等）など、これがスタンダード。

スポーツは地域振興や産業振興のキラコンテンツ、基本はホーム&アウェイ。人が動けば交通が儲かる、飲食が儲かる、建設が儲かる。スポーツは観光資源だ。ただし磨かないと資産にならない。

そうしてスタートしたのが J リーグ 100 年構想。新しいことをスタートするとき「抵抗勢力が出てくる」のが世の常、自分で何もやらないが、揚げ足を取るのがうまい人がいる。



写真-6 川淵氏との 2 ショット写真

◆ 抵抗勢力

ある幹部が、「どこの企業がサッカーに金を出すんだ、時期尚早だ」。別の幹部が、「日本にはプロ野球があるじゃないか。サッカーのプロ化でうまくいった前例がない。失敗したら誰が責任をとるんだ」。これを聞いた二宮さん、「もうこれでダメになったな」とがっかりした。

その瞬間、川淵さん（机を叩いて）「“時期尚早”という人間は、100年たっても ” 時期尚早 “ と言う。” 前例がない “ という人間は 200年たっても ” 前例がない” と言う。」

二宮さんは、生まれて初めて背中に電流を感じた。続けて川淵さん（机を叩いて）「そもそも ” 時期尚早 “ という人間は ” やる気がない ” だけ。

『やる気がない』とは情けなくて言えないから、「時期尚早」という言葉でごまかそうとする」。

「“前例がない”という人間は“アイデアがない”だけ。恥ずかしくて言えないから、“前例がない”といって逃げようとする」。「仕事ができない奴は、できない理由ばかり考えてくる。最初出来ないのは当たり前。できないことに挑戦して出来るようにするのが仕事だ」。「わかったら、二度とおれの前でできない理由を述べるな」。

このリーダーの言葉がなかったら Jリーグは絵に描いた餅になっていたんじゃないか、最後にリーダーの覚悟と度胸がないと進まない。

リーダーの一番の仕事は、ぶれないこと
川淵さんから学んだこと 3 点

Passion (情熱)

Mission (大義)

Action (行動力)+Vision (将来展望)

二宮さんを含め 10 人で集まって、目を閉じて川淵さんが「J リーグはうまくいくと思うか？」と聞いた。あとから聞いたら、2人しか「成功する」と手を挙げていなかった。

川淵さん、「だからおれの仕事だったんだ」。

4. 交流パーティーでのひとこま

二宮氏は、交流パーティーにも参加され、会場の参加者と一緒になって、第九合唱～歓談の一時を楽しんでおられた。四国四県の郷土料理を出店

した”屋台”では、讃岐うどんや鯉のタタキなどを堪能されていた。(下の写真は、古野大会実行委員長と乾杯されている様子)。



写真-7 交流パーティーの様子

また、四国の地酒コーナーでは、偶然にも、二宮氏のご実家の隣にある造り酒屋の「川亀」が並べられており、郷里の話に花が咲いた。



写真-8 二宮氏地元の地酒「川亀」

5. おわりに

記念講演の日は、ラグビーワールドカップの開催中でもあり、当日お迎えに伺ったところ、もう 5 試合観戦したとのこと。ちなみに、大会前日は日本 vs サモアの試合があり、ウェルカムパーティー後の二次会で、防災支援委員会の皆さんとこの試合を観戦しながら盛り上がったことを、今でも鮮明に覚えている。

二宮先生からは、我々地方にとっての重要課題でもある「地域活性化」へのヒントとそれを引っ張っていくリーダーのあり方について示唆いただいた。ありがとうございました。

「第 46 回技術士全国大会(四国・徳島)が盛況のうちを終えることが出来たのは、ご多忙中にもかかわらず、快くご講演をお引き受けくださった、二宮清純先生のお陰だと思っている。改めて御礼を申し上げ、記念講演報告とする。

第46回 技術士全国大会(四国・徳島)


『新たな世代(とき)へ、技術士の挑戦』
～四国・阿波からのメッセージ～

会期 2019年10月5日(土)～8日(火)

会場 あわぎんホール(徳島県徳島市)他

■記念講演

10月6日(日) 15:15～16:45
あわぎんホール4F大会議室

『スポーツを通じた地域活性化』 
二宮 清純 氏 (スポーツジャーナリスト)

■主催



お問合せ 公益社団法人日本技術士会四国本部 第46回技術士全国大会(四国・徳島)実行委員会事務局
〒760-0067 香川県高松市松福町2丁目15-24 香川県土木建設会館3F
TEL.087-887-5557 FAX.087-887-5558 Email:ipej-shikoku@me.pikara.ne.jp

資料-1 記念講演リーフレット(表)

記念講演：「スポーツを通じた地域活性化」 二宮 清純 氏 (スポーツジャーナリスト)

【プロフィール】

1960年愛媛県生まれ。スポーツ紙や流通紙の記者を経て、フリーのスポーツジャーナリストとして独立。オリンピック、サッカーW杯メジャーリーグ、ボクシング世界戦など国内外で幅広い取材活動を展開。明治大学大学院博士前期課程修了。広島大学特別招聘教授。大正大学地域構想研究所客員教授。認定NPO法人健康都市活動支援機構理事。株式会社スポーツコミュニケーションズ代表取締役。

【HP】 <https://www.ninomiyaasports.com>

〈主な著書〉

- 「スポーツ名勝負物語」(講談社現代新書)
 - 「勝者の思考法」(PHP新書)
 - 「変わらない組織は亡びる」(河野太郎議員との共著・祥伝社新書)
 - 「昭和プロ野球の裏側」(衣笠祥雄氏、江夏豊氏との共著・廣済堂出版)
 - 「歩を『と金』に変える人材活用術」(羽生善治氏との共著・廣済堂出版)
- など著書多数

【講演概要】

スポーツはあらゆる産業の中で、唯一、副作用のない産業である。クラブができれば人が集まる。人が集まれば消費活動をする。地域には一体感が生まれ、まちの知名度も増す。今後は経済効果のみならず、“心のインフラ”としても、スポーツの持つ価値は、いよいよ高まっていくだろう。また、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを成功させ、日本が世界から「スポーツ大国」との評価を得る上で、カギになるのはパラリンピックではないかと考える。障がい者スポーツの環境整備は、この先ますます進む高齢化に対する備えともなる。バリアフリー化は障がい者のみならず、高齢者や要介護者にとっても有益である。そして、それこそは本来の意味での「レガシー」だろう。



資料-2 記念講演リーフレット(裏)

交流パーティー報告

四国本部（徳島県）
パーティー班 桑原 豊秀
技術士（建設部門）



1. 交流パーティー次第

- ・ 歓迎セレモニー 第九合唱
指揮：鳴門教育大学名誉教授 頃安俊秀様
ピアノ伴奏： 吉成くみ様
合唱：認定 NPO 法人鳴門「第九」歌う会
- ・ 開会挨拶 日本技術士会会長 寺井和弘
- ・ 来賓挨拶 参議院議員 新妻秀規様
文部科学省 科学技術・学術政策局
人材政策課長 奥野 真様
徳島大学学長 野地澄晴様
- ・ 乾杯 四国大学学長 松重和美様
- ・ 歓談 アトアクション 阿波踊り【娯茶平】
四国四県の地酒・郷土食
- ・ 次回大会案内 中部本部長 平田賢太郎
- ・ 閉会挨拶 日本技術士会副会長 笠原 弘之

2. 交流パーティーの様子

交流パーティーの歓談を阿波踊りと「四国四県の郷土食と地酒」で楽しむ場にしようと企画して臨み、来賓・パネリストの先生方を含め想定人数を上回る総勢約 360 名の方に参加していただきました。

歓迎セレモニーは、認定特定非営利活動法人 鳴門「第九」を歌う会の有志の皆さまの「第九合唱」をお聴きいただきました。皆さまご存知のベートーヴェン「第九」交響曲は、今から 101 年前に、徳島県鳴門市にありました「板東俘虜収容所」に収容されていたドイツ人俘虜により、アジアで初めて全楽章演奏が行われました。戦時中でありながら、ドイツ兵俘虜と、彼らを受け入れた地元住民との心温まる交流から生まれた「なるとの第九」は、私たち徳島県民の誇りであると共に、「世界平和と人類愛」を未来へ伝える文化遺産でもあります。

その時の俘虜収容所の所長が、会津人 松江 豊寿氏です。昨年の全国大会開催地 会津郡山から今年度の徳島への架け橋として、どうしてもご披露したかった「第九合唱」が実現しまして、我々スタッフ一同感慨深いものがございました。



認定 NPO 法人鳴門「第九」歌う会による合唱

また、歓談をより楽しんでいただくため、四国四県の地酒と郷土食を取り寄せました。徳島の竹ちくわ、フィッシュカツ、香川の讃岐うどん、高知の鰹タタキ、愛媛のじゃこ天の屋台を会場の前方右側に、地酒コーナーを会場の右側に設け、四国の会員が接待役となり、全国の皆様に味わっていただきました。

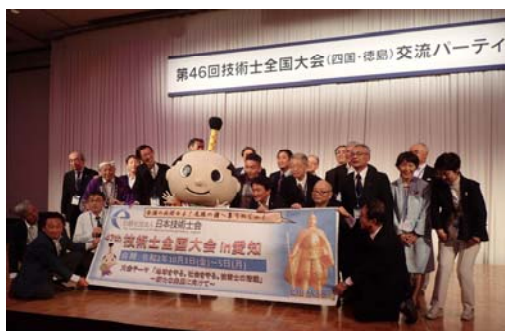
アトラクションは、徳島が世界に誇る伝統芸能で 400 年を超える歴史を持つ阿波おどりを有名連の「娯茶平」に披露していただきました。続いてお囃子に合わせ、日本技術士会防災支援委員会有志がこの日のために準備した法被を着て踊り込み、その踊りの輪に来賓の先生方、参加者を誘い、会場いっぱい踊り広げ、時間の許す限り楽しんでいただきました。

会場全体がお酒と阿波踊りの余韻に酔いしれたところで、次回開催地の中部本部長より大会 PR が行われ、四国から中部へとバトンが渡されました。

そのあと閉会の辞とあわせて一丁締めで閉会となりました。



娯茶平・防災支援委員会有志・参加者による阿波踊り



次回開催地 PR の様子

り参加者全員の第九の大合唱で一体感や高揚感を体験していただけたと思います。

後日、「大変良かった」とのお言葉をいただき安心した次第です。

最後に、次回開催地愛知での盛況を祈念しまして報告の結びと致します。

3. 交流パーティーを振り返って

事前の入念な打ち合わせとフリーアナウンサーの平石香奈子さんの司会進行により交流パーティーは円滑に進み、無事終えることができました。

一方、会場施設上、大会式典・記念講演会場から別施設のパーティー会場への移動を余儀なくされ、参加された皆様方にはお疲れと戸惑いを与えたのではないかと反省しています。

歓迎セレモニーは「鳴門第九を歌う会」の有志の方が黒と白の衣装に身を包んで登壇し、凛と張りつめた何とも言えない雰囲気醸し出して下さ

パートナーズツアー報告

～ 大塚国際美術館と鳴門の歴史を堪能 ～

四国本部（徳島県）
ツアー班 木村 充宏
技術士（建設部門）



1. はじめに

第46回技術士全国大会では10月6日（日）、技術士のパートナーの皆様を対象に、徳島県鳴門市とその近隣をめぐるパートナーズツアーを行いました。

参加者は40名、集合時には小雨でしたが、その後晴天に恵まれ、ツアー時間中は過ごしやすい気候の中での実施となりました。

当日にめぐり見学地をご紹介します、その見どころを簡単にご紹介したのち、バスツアーをスタートしました。

2. 藍の館で藍染体験

最初の訪問地は藍の館です。参加者の皆様は各々の好きなデザインで真っ白なハンカチをきれいに染め上げました。

同じ柄でも染め上げる人によって少しずつ個性が違い、それぞれが世界に一つだけのデザインになるため、皆さんが楽しそうに作業されているのが印象的でした。染め上げた作品と一緒に記念撮影をされている方も多くいらっしゃいました。



写真-1 藍染体験館前にて



写真-2 藍染体験中

その後、藍染で栄えた旧奥村家の屋敷を見学し、藍染商品のお土産を購入されていました。お土産の物産で時間が足りないほど、参加者の皆さんが様々な商品に興味をお持ちでした。



写真-3 旧奥村家屋敷内でお土産購入

3. 大塚美術館で世界の名画を鑑賞

次の訪問地は大塚国際美術館。ここで集合写真を撮影しました。米津玄師さんの檸檬でさらに有名になったこのスポットでは、ガイドさんの案内の下で多くの絵画を鑑賞しました。



写真-4 大塚国際美術館前で集合写真

ガイドさんが絵画の説明書きに記載されていない情報をたくさん提供して下さったおかげで、参加者の皆さんは興味津々でした。



写真-5 最後の晚餐前で説明を聞く様子

その後美術館内で昼食を取りました。ワインを飲まれた皆さんは頬を紅潮させ、更にテンションを上げて次の訪問地へ向かうことになります。

4. 四国 88 か所の 1 番札所、霊山寺を参拝

大塚国際美術館を後にし、次に到着したのは四国 88 か所めぐり最初の札所である霊山寺です。



写真-6 霊山寺前で集合写真

皆さんそれぞれにお賽銭を用意して参拝されていきました。また、納経帳などにも興味を示され、購入される方もいました。



写真-7 参拝に向かう様子

5. 大谷焼の登り窯見学

最後の訪問地は大谷焼の窯元である森陶器です。生憎登り窯は稼働していなかったのですが、巨大な登り窯見学と共に、水琴窟の澄んだ音色を楽しまれていました。



写真-8 登り窯と水琴窟を楽しむ

その後は大谷焼のお土産購入です。バス出発時間いっぱいまで、多くの方が焼き物を物色、購入されていました。

6. おわりに

技術士のパートナーであることも理由の一つでしょうか、参加者の皆様が、何事にも興味津々であることが印象的でした。

参加者の皆様大変お疲れ様でした。再訪をお待ちしています。

テクニカルツアー【A】報告

～ 大歩危舟下りと秘境の祖谷散策 ～

四国本部（徳島県）
ツアー班 納田 正徳
技術士 （建設部門）



1. はじめに

本ツアーは、徳島県西部の代表的な観光地をバスで巡る日帰りコースである。技術士 27 名、同伴の奥様方 8 名（男性 26 名、女性 9 名）の全 35 名と大勢のご参加をいただき、テクニカルツアーの中で一番人気のコースとなった。

各分科会、大会式典、記念講演等の行事の翌日の締めとして実施したテクニカルツアーは、私事で申し訳ありませんが、前々日、前日と早朝から実行委員のメンバーとして参加していたこともあり、非常にハードな一日となった。

しかしながら、参加された皆さんと楽しいひと時を過ごすことができたことは幸いでした。

大会開催前には、台風 18 号の影響も心配していたが、ツアー当日は天候に恵まれ、吉野川の清流や祖谷溪の素晴らしい眺望を堪能できた。



写真-1 出発前のバスの中

2. 祖谷のかずら橋

祖谷溪は、日本三大秘境の一つに数えられ、とりわけ、祖谷のかずら橋は、徳島県を代表する観光地のひとつである。かずら橋は、シラクチカズラを縄状に組み、ワイヤーで補強して架設され、3年に一度、架替えが行われている、橋長 45m、幅員 2m、水面上約 14mの吊橋である。



写真-2 かずら橋全景(下流側より)

我々以外にも外国人観光客が同時に渡っていたためかなり揺れ、また、足元の板の隙間も結構広めに取り付けられていたこともあり、皆さん、ワイワイはしゃぎながらも、恐る恐る渡っておられたのが印象的であった。渡り終わった後には、平家伝説の残る「琵琶の滝」(落差約 50m)の前で、皆さん、マイナスイオンを浴びることができた。



写真-3 ごゆっくり(最後ですよ)



写真-4 「琵琶の滝」の前で

この後、かずら橋より5分位のところにある「祖谷美人」で昼食を楽しんだ。



写真-5 昼食前のひと時



写真-8 乗船中の風景

3. 大歩危峡観光遊覧船の川下り

大歩危峡では、国指定の天然記念物である含礫片岩（ガンレキヘンガン）や砂質片岩の岩肌を見ながら、観光遊覧船に乗って川下りを楽しんだ。乗員の制約で2艘に分かれたが、おかげで乗船中の様子を撮影することができた。

前日までは、台風の影響で増水していたことで遊覧船は中止されていた、とのこと。ツアー当日に再開したと聞き、ラッキーでした。



写真-6 乗船前に全員集合



写真-7 これから出航

4. ラピス大歩危(妖怪屋敷と石の博物館)

妖怪屋敷はおまけだったが、様々な国、地方の宝石類や珍しい石の展示を見学した。先にメインの2箇所を堪能されており、皆さん多少お疲れ気味だったのか、ここでは、多少盛り上がりには欠けたご様子であった。



写真-9 石の博物館にて

5. おわりに

ラピス大歩危を最後に帰路に着き、終点徳島駅前には当初の予定より30分以上早い16時15分頃無事到着し、本ツアーは終了した。

平均年齢65.5歳、最高齢79歳のご参加をいただいた今回のツアー、皆さん、大変お疲れ様でした。また、大変お世話になり、ありがとうございました。

十分なお世話もできず、反省することしきりですが、ご縁があれば、また来年、名古屋でお会いしましょう。

テクニカルツアー【B】報告

～ 阿波文化満喫 ～

四国本部（徳島県）
ツアー班 天羽 誠二
技術士（建設/総監部門）



1. はじめに

本ツアーは、「阿波文化満喫」と題して徳島市内をバスで巡る日帰りコースです。技術士 14 名、同伴の奥様方 4 名（男性 14 名、女性 4 名）、全 18 名のご参加をいただきました。

専門会議、第 2 分科会、大会式典、記念講演、ウェルカム・交流パーティー等の行事後の締めとして実施したもので、私事ではありますが、期間中は早朝から実行委員として参加していたこともあり、やや疲れも感じていましたが、ご参加いただきました皆さまと、楽しいひと時を過ごすことができたことは、とても楽しく幸いでした。

当日は快晴に恵まれ、むしろ暑い位の気候で、藍染め体験、人形浄瑠璃鑑賞から始まり、新町川を船で周遊し、昼食は 117 年の歴史を持つ「総本家橋本そば蔵」で蕎麦をいただき、眉山山頂からは徳島市内を一望し、最後は阿波踊りで締めくくると言う、阿波文化を心置きなく堪能しました。

2. 藍住町歴史館 藍の館

幾つかの染め上がりのパターンから好みのパターンを選び、白い布地が上手く染まるように、皆さん藍液中に手を入れて、和気藹々と談笑しながら頑張りました。短時間ですが楽しみました。



写真-1 染め上がりパターンに立候補



写真-2 藍染め体験・談笑中

3. 阿波十郎兵衛屋敷

阿波十郎兵衛屋敷は、徳島藩の政策で犠牲となり処刑された庄屋、板東十郎兵衛の屋敷跡で、「傾城阿波の鳴門」ゆかりの場所です。

人形浄瑠璃鑑賞に先駆けて、人形操作を体験しました。3 人一組で、頭、手足を操作します。さてさて、ツアー代表 3 名のチームワークはいかがでしょうか？意外にお上手ですよ。



写真-3 人形使いを体験実演中

人形浄瑠璃では、徳島藩のお家騒動で盗賊に身をやつした十郎兵衛、お弓夫婦が住む大阪玉造に、巡礼姿の娘お鶴がはるばる阿波から父母を尋ねてきて、身の上話で我が子とわかるが、自らの詮議が娘に降り懸からぬよう涙をのんで分かれる、母の情けが切ない「巡礼歌の段」を鑑賞しました。



写真-4 巡礼歌の段



写真-5 阿波十郎兵衛屋敷で「お鶴」と記念写真

4. ひょうたん島クルーズ

徳島市は街の中を縦横に川が流れ、幾つもの島で構成された水都です。これを実感できるのが市内中心部を流れる新町川と助任川に囲まれた「ひょうたん島」と呼ばれる中州を一周する、周囲 6km、約 30 分の「ひょうたん島」クルーズです。

心地よい川風と、頭上ギリギリでいくつもの橋を横過するスリルを味わいながら、船長中村さんのユーモアたっぷりで、しかしながら懇切丁寧な水都徳島の歴史紹介を聞きながら、参加者全員、しばし暑さから解放され、ホットしつつも話弾んだ一時を過ごしました。



写真-6 クルーズ船に乗って、いざ出発

5. 眉山観光と本場阿波踊り体験

ひょうたん島クルーズの後、ロープウェーで眉山山頂に登り、徳島市内や遙か淡路島、和歌山を一望していただきました。眉山と言えば、シンガーソングライターの「さだまさし」さんの小説でも描かれ、2007年には松嶋菜々子さん主演で映画化され有名になりました。

山頂では、暑さから避けるように参加者全員で日陰を探しました。



写真-7 眉山山頂から市内を一望

阿波踊り会館では、昭和初期から現在に至るまでの阿波踊りの踊り方の変遷や、鳴り物の役割等の説明を聞き、また、会場全員で踊り方を練習し、ツアー参加者の有志の方々もステージでプロに混じって本場の阿波踊りを体験しました。

ツアー参加者のご夫婦が選ばれ、記念品をいただきました。良い思い出になったものと思います。



写真-8 阿波踊り、素敵なお夫婦で賞

6. おわりに

わずか7時間の市内観光でしたが、ほぼ予定通りに徳島駅に到着し、みなさまと別れを惜しみました。ツアー世話役として不慣れな私を、温かく見守って下さった参加者のみなさま、ありがとうございました。今回のツアーがみなさまの記憶に残るものとなれば、幸いです。ご縁があれば、また来年、名古屋でお会いいたしましょう。

テクニカルツアー【C】報告

～ 秘境 祖谷温泉の旅 ～

四国本部（徳島県）

ツアー班 松本 晃治

技術士（建設/総合技術監理部門）



1. はじめに

第46回技術士全国大会の締めくくりとして、1泊2日の当ツアーが企画された。ツアーコースは、福寿醤油・松浦酒造の工場見学に始まり、四国八十八箇所 88番札所の大窪寺で終わる徳島県内及びその周辺の文化や自然を満喫するものであった。参加者は、夫婦7組（14人）、私（世話役）、添乗員さん、バスガイドさん、運転手さんであった。

ツアー出発前は、大会最終行事に小人数で携わることへの不安があったが、他のテクニカルツアーの世話役（天羽誠二氏、納田正徳氏）との情報交換や連絡待機係りの神田幸正氏との連絡により、不安感や孤独感が解消され、参加のみなさんと楽しい時間を過ごすことができた。

2. 初日のツアー（福寿醤油・松浦酒造・阿波十郎兵衛屋敷・うだつの町並み・あんみつ館）

10月7日の初日は、徳島駅でツアーバスに乗車し、鳴門市へ向かい、創業190年の「福寿醤油」で工場見学・試食・購入を行った。

その後、隣接する創業200年の「松浦酒造」で蔵見学・試飲・購入を行った。試飲では、原酒から、ろ過や火入れすることにより変化する香り・味が比較でき日本酒好きには至福の時間となった。



写真-1 松浦酒造での蔵見学

本日、3箇所目は、「阿波十郎兵衛屋敷」での人形浄瑠璃鑑賞であった。阿波人形浄瑠璃は、国の重要無形民俗文化財に指定されており、今回は「傾城阿波の鳴門」を鑑賞し、阿波徳島の貴重な文化に触れることができた。

次に阿波市土成町へ向い、「たらいうどん」の昼食をとった。大きなたらい満杯になった、うどんを堪能した。



写真-2 たらいうどんの昼食

午後は、美馬市脇町で「うだつの町並み」を見学した。当地域は、かつて脇城の城下町として成立し、藍の集散地として発展し栄えた場所で、富や出世の象徴であったうだつ（防火壁）を屋根につけた町並みが有名である。



写真-3 うだつの町並み見学

次に、洋ランの展示・販売で有名な「あんみつ館」に立ち寄った。当館から出品したシンビジウムは、10年に一度オランダで開催している花のオリンピック「フロリアード」で連続金賞一席となり世界一の評価を得ている。

今は胡蝶蘭が咲く季節で、華やかでみごとな胡蝶蘭に囲まれ、幸せなひと時を過ごした。



写真-4 あんみつ館で胡蝶蘭に囲まれて

宿泊は、ケーブルカーで上る「天空露天風呂」が有名な「新祖谷温泉ホテルかづら橋」であった。露天風呂につかり、山里の景色を堪能し、夕食では、でこまわし（いも・豆腐・こんにゃくの串焼き）や鮎の塩焼きといった郷土の味覚を囲炉裏端で味わった。



写真-5 新祖谷温泉ホテルかづら橋とボンネットバス

3. 2 日目のツアー(祖谷のかづら橋・大歩危峡観光遊覧船・大窪寺)

10月8日の2日目は、ボンネットバスにのり、「祖谷のかづら橋」散策へと向った。日本三大秘境の一つである祖谷溪にかかり、国の重要有形民俗文化財に指定されている当かづら橋は、シラクチカズラで編まれた橋長45mのつり橋である。床面も割木を荒く編んだだけであり、ゆらゆらゆれ

る橋をスリルを感じながら、渡った。



写真-6 祖谷のかづら橋全景

剣山国定公園内の吉野川中流域に位置する大歩危峡で遊覧船での川下りを楽しんだ。ダイナミックな三波川帯変成岩の岩肌が、印象的であった。



写真-7 大歩危峡観光遊覧船へ乗船

最後に四国八十八箇所霊場 88 番札所「大窪寺」を巡礼した。パートナーズツアー参加者は1番札所と合わせて、最初と最後の札所巡礼となった。



写真-8 大窪寺へ巡礼

4. おわりに

徳島阿波おどり空港を經由し、徳島駅に予定より30分以上早く到着し、みなさんと別れを惜しんだ。ツアー世話役として不慣れな私を、温かく見守って下さった参加者のみなさん、ありがとうございました。今回のツアーがみなさまの記憶に残るものとなれば、幸いです。

第46回技術士全国大会(四国・徳島)組織体制

四国本部大会委員会(役員会)
顧問：加賀、武山特別顧問 委員長：古野本部長 副委員長：増田、細谷、須賀、右城副本部長 委員：各幹事、会計幹事 事務局：事務局長、事務局次長、事務局員



四国本部大会実行委員会 委員長:古野本部長 副委員長:増田副本部長(徳島)、栗本事務局長			
部 会	役 割 ・ 分 担	四国本部メンバー	徳島県メンバー
企画・総務部会	スケジュール・プログラム管理 予算調達・管理、危機管理 後援、来賓の依頼・調整 統括本部、他機関との調整 その他	部 会 長:谷脇総務委員長 副部会長:富士総務副委員長 部 会 員:総務委員・事務局	豊崎 裕司 菊池 昭宏 天羽 誠二 大村 史朗 佐藤 悦史
会場部会	関連行事 分科会 大会式典、記念講演 パネル展示	部 会 長:富士事業委員長 副部会長:木下修習委員長 副部会長:大村修習委員 部 会 員:事業・修習委員	桑原 豊秀 金澤 隆 森田 朗 花岡 史恵 山口 博昭
パーティー部会	ウェルカムパーティー 交流パーティー	部 会 長:豊崎事業副委員長 副部会長:渡辺試験副委員長 部 会 員:事業・試験委員	藤本 一郎 工藤 宏樹 仲間 真紀
旅行部会	パートナーズツアー テクニカルツアー	部 会 長:天羽防災委員長 副部会長:白鳥青年委員長 部 会 員:防災・青年委員	納田 正徳 松本 晃治 神田 幸正 木村 充宏 中川 頌将
編集・広報部会	大会資料、記念誌 案内・PRチラシ、広報 大会記録	部 会 長:菊池広報委員長 副部会長:佐藤青年副委員長 部 会 員:広報・青年委員	田中 良典 松田 秀和

